

和歌山県知事指定郷土伝統工芸品

のかじはもの

# 野鍛冶刃物

平成14年指定 / 指定された地域(新宮市)

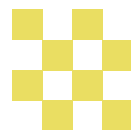
## 鉄と火と技に鍛えられる野鍛冶刃物

和歌山県の南部、熊野川の河口に位置する新宮市は、熊野三山の一つである熊野速玉大社を有する町。かつて川を利用した木材や炭の集積地として栄え、人と物が行き交う熊野地方の中心地でした。その中で受け継がれた伝統工芸が「野鍛冶刃物」。新宮市に今も残る元鍛冶町や新鍛冶町の地名は、たくさんの鍛冶職人がいた名残であり、30軒程の鍛冶屋が軒を連ねていたといえます。



大川鍛冶  
●野鍛冶職人  
大川治さん

昭和11年生まれ、新宮市出身。かつて10人程の職人を抱える大鍛冶屋「大川鍛冶」の3代目として生まれ、17歳から職人の世界に入ります。初代の祖父と2代目の父に鍛えられ、兄弟弟子と競い合いながら技を修練。仕事は林業関係が盛んな町として、斧や鉈など山林道具が中心。折れず曲がらず、よく切れると評判。現在、野鍛冶の伝統技法を生かし日本刀も手掛けています。



## 腕を競って鍛えた林業用の刃物

鍛冶屋はあらゆる仕事の原点でした。田や畑を耕すには、鉈や鎌、山仕事では斧や鉈が必要でした。家庭では毎日のように台所で包丁が使われています。これらのすべてが鍛冶屋の仕事。中でも「野鍛冶刃物」は斧や鉈、下刈鎌など、林業関係の刃物が中心。その昔、熊野川の豊かな水脈に育まれた新宮市は、たくさんの船が往来する熊野材の集積地として、製材業が目覚ましい発展を遂げていました。そのため、林業に従事する山師がこの地域に集まり、彼らを使う道具を造る鍛冶屋が軒を連ねていました。

## 山師と鍛冶屋、生活をかけた真剣勝負

「祖父である初代が三重県の鍛冶場からこの地にやって来たのが大正5年。その頃には組合があり、30軒程が加入していたと聞いています。鍛冶屋も農具の専門や包丁専門などいろいろで、うちは山林道具を中心にしていました。」伐採用の斧や備長炭の原料を切る鉈、柄鎌と呼ばれる道具、筏師の道具など、鍛えるのはもっぱら林業用の刃物だったと「大川鍛冶」の3代目・大川治さんは話します。昭和5年、新宮市相筋に工房を移しました。「山師も生活がかかっていますから、下手な刃物を造ろうものなら、凄い勢いで怒鳴り込んできましたよ。当然、こちらも生活があるから命がけ。そうやって職人は鍛えられ、技を磨いてきました。」



## 守り受け継ぐ先代からの技と信用

昭和30年頃から林業の衰退が始まり、繁栄の転機はチェーンソーの普及。現在、新宮市内で操業を続けている大川鍛冶。「今まで看板を守れたのはひとえに、祖父と父が築いた信用のおかげ。」今、野鍛冶職人として鍛冶場に立つのは、大川さんただひとり。しかし、代々受け継いだ技と信用はしっかりと守り、現在も山仕事の刃物を鍛えています。「鍛冶屋の仕事は、相反する面も併せ持っています。刃物を硬くするため、高温で熱した鉄を急冷させる。しかもただ硬いだけではなく、砥石で研げる滑らかさも求められます。だからこそ難しくて面白い。今もまだ勉強中です。」常に向上心をもつ、この道60年の熟練者。

## 【野鍛冶刃物の制作工程】

「道具は人によって使い方が異なります。その使い心地によって仕事の効率が上がったり、売り上げが伸びたり、生活を左右するものです。だからこそ常に真剣勝負。山も鍛冶場も、命がけの現場だと思っています。」と大川さん。昔は手で鉈を持って、鉄や鋼を叩き伸ばしていました。聞こえてくる金属音で、どの鍛冶場が鉄を鍛造しているのか分かるほど、それぞれに特徴のある叩き方をしたといいます。現在は、ベルトハンマーを使用。しかし最後は、鍛冶職人の手仕事。燃え盛る炉から、真っ赤に焼けた鉄を引き出し、鉈で打ちます。「山で使う道具は木の節に負けないよう硬くないといけません。」



## 斧の細長いみぞにもいにしへの教え

山仕事で斧は、木を切り倒すために使うもの。「おの」とも言いますが、山師や鍛冶職人は親しみを込めて「よき」と呼んでいます。大川さんは、「山への感謝の意味が込められています。」と話してくれました。実は斧には、両面に細長いみぞが彫っており、片面に3本、裏面に4本。お神酒を表しているのが3本の方のミキ、4本はヨキと呼んで山海の収穫物を指しています。木を伐採する際には、お神酒と収穫物を捧げる代わりに、斧を木にもたれかけさせて、山への感謝と作業の安全を祈ったそうです。また一説には、裏表合わせて7本の北斗七星を表し、北辰信仰の意味があったともいわれています。

